

稱讚

一九九号

二〇一九年七月一日発行

善人なほもって往生をどぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとつは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をどぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなれるることあるべからざるにを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。

『歎異抄』第三章

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三十五二四二二二〇二五

FAX 〇三十五二四二二二〇二六



二〇一九年度 永代経法要

二〇一九年七月七日

宗門総合振興計画「懇志のご案内

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

先月に引き続き、「悪人正機」について、一緒に考えてみたいと思います。

よくご法話で「そのままのお救い」とお聞きすることがあります。

「そのまま」と聞いて、「このままでいいんだ。何もなくていいんだ。」と受け取ってしまう。そこまでは良いと思うのですが、大抵は、自分の都合で、その言葉を解釈、受け取ってしまっている。ことに気づいていないのではないのでしょうか。また、逆に、何もなくていい」ということは、到底信じられず、疑ってしまうのが、私の心であろうと思います。

「そのまま」と言うのは、私の側から、例えば、「自分らしさ」とか言うように、私の側から判断しているのではなく、阿弥陀さまの方からおっしゃっていることでもあります。

悲願は、たとへば・・・磁石のごとし、本願の因を吸うがゆゑに」（『教行信証』行巻）とあります。また、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』後序）ともあります。

ある意味おこがましいことかもしれませんが、阿弥陀さまから見られた「私」の实体を知る、知らしめられると言うことが、「機」の深信」と言うことであろうと思います。

稱讚寺永代経法要 厳修

七月七日（廿）、七夕の日、この日、あいにく雨でありましたが、稱讚寺永代経法要を厳修いたしました。

野口明美さん、福井恒彰さん、中木原乃既子さん、高橋八重子さん、山田昌三さん、巽光雄さんが、十二時半までにお出でくださり、お齋を一緒に食べました。

お齋は、築地本願寺の紫水さんに頼みまして、精進のお弁当にいたしました。

二三時三〇分からおつとめを行う予定でしたが、雨も降っていることもあり、三〇分早めて三時からおつとめいたしました。

おつとめは、『忉説無量寿経』をおつとめいたしました。

その間に、福富淑子さんと池田直子さんがご参拝にられました。

巽さんは、稱讚寺へは初めてのご参拝であり



ました。今年四月に奥さまがご往生なされ、奥さまのご実家が私の学生時代からの友人である奈良の勝林寺さんのご門徒さんであられた関係で、そのご住職よりお葬式への出勤を依頼されたことがきっかけであります。

勝林寺さんの離郷門信徒さんとして、これからも東京では稱讚寺がお取り次ぎさせていただきますように思いますので、巽さんに対して、またご縁の皆さまに対して、今後とも宜しくお願い申しあげます。

法話は住職がさせていただきます。

今日は、七夕ですが、七夕も「盂蘭盆会」とつながりがあるようです。七夕では、短冊に夢や願い事を書いて、笹の枝に吊します。

多くは、夢や願い事を書いて、神さまにお願いいしても叶うわけではなく、自分で努力することを知っています。スポーツにおいても、競技者は目標を持って、自分なりに努力します。応援は、その競技者が勝つことを願い、応援しま

すが、応援も力になるとは言え、やはり競技者の努力が必要です。
私たちの日常生活においては、「願い」を叶えるためには、それなりに、自分が努めなければなりません。
現代は「幸」と書いて「さち」「あわせ」と読みます。

「幸」は「手かせ 手錠」の形から成り立っています。「執着」の「執」は、手錠を掛けられた人が丸まっている姿を表わしています。「拘束される」「縛られる」の意味がある



「幸」の字が「幸福」とか、「幸せ」の意味で使われているのです。

「浄土三部経」では、この「幸」の字が「一力所だけ使われています。伝説無量寿経」の「讚仏偈」に「幸仏信明 是我真証」とあります。阿弥陀さまが法蔵菩薩の時、全ての衆生を救いたいと思っっている心、時の仏さまである世自在王仏さまに、おわかりいただくよう懇願しているところ、です。「幸」は「ねがわくは」を読まれます。「幸 ねがわくは」は、その目標に向かつて、賢明に努力していく姿勢を表わしているのです。だから、自由奔放ではなく、集中しなければならぬからこそ、「幸」の字が使われるのかもしれない。法蔵菩薩様の崇高な願いには到底及ばない私の「ねがい」も「願」ではなく、「幸」なのでしょう。そこには、自力」



が必要なので、本日、ご一緒におつとめしました。伝説無量寿経』は大変長いお経で、その内、四十八願文と本願成就文、流通文を中心に読まれたものでした。



阿弥陀さまの「ねがい」では「本願」と言われるように「願」が使われています。多くの宗教は「願う宗教」であります。仏教は、本来、仏に成る「悟りに至る」宗教」であります。

聖道門」と「浄土門」に分かれます。聖道門」は、仏に成るため、僧侶が修行する道であります。修行できない一般人々は、その修行する立派なお坊さんを頼って救われようとねがうのです。浄土門」は、もうこの世には自ら仏に成れることは出来ないから、阿弥陀さまのご本願によって、救われるしかないという教えです。

法然聖人・親鸞聖人以前は、至心信樂欲生我国乃至十念」の「欲生我国」を「私阿弥陀仏」の浄土に生まれたいとねがいなさい」との言葉に、浄土に生まれることを願い、生まれるための努力をしなければならぬと捉えられていました。例えば、お念仏を数多く唱えなければいけないとか。善い行いをしなければいけないとか。実は、現代の浄土真宗を信仰する私たちも、いつしか、「願う宗教」になっているところがあるようです。



しかし、親鸞聖人は、阿弥陀さまのご本願は、唯一つ、どんなことがあっても、必ずあなたを仏にします」という誓いであり、願いであり、その「誓願」は既に成就」しておられるのだから、そのご本願のおいわれ「南無阿弥陀仏」のお呼び声を聞き、受け入れていくことが「ご信心をいただく」ことだとおっしゃったのであります。

そのまま救う」とは、じゃあ、私はこのままでいいのだ」と勘違いすることではなく、罪悪深重・煩惱熾盛」の私ではないと言ふことを知らしめられたことであり、阿弥陀さまの方が、一方的に、そういうあなただからこそ、私が必ず仏になります」とはたらいてくださっていると味わうことでもあります。

願う宗教」ではなく、阿弥陀さまが願い、それもただ願っておられているのではなく、既に成し遂げられて、はたらくき続けておられる」という意味での「本願」なのです。阿弥陀さまのご本願にかなった生き方」とは、阿弥陀さまに応えるための生き方を要求していることではないと思います。

親鸞読本』

―その人間像の追求―

村上速水先生著

世間的と出世間的立場のちがい

さらに仏教における善悪は、次のような観点から判断されることも注意しておく必要がある。仏教では人間の行為について、身業、口業、意業の三種に区別する。その中、はじめの一業を思已業、後の一業を思業と分ける。換言すれば思已業は身体や口に表れた行為であり、思業とは表れる以前の意思行為である。世間的な立場では、善悪の判断は思已業についてするのが普通であるが、仏教においてはより根源的なものとして意業について判断を下すのである。ここでも仏教の立場は世間的に比べれば、はるかに厳密な立場に立っているといえることができる。何となれば、人間はしばしば表裏不相応であり、内外不一致であるからである。いな、人は容易に内面の意思や感情を表面にあらわさないし、しばしば内心と相反する動作を示し、言葉を用いるからである。だから表面に表れた行為が善と見えるような場合でも、裏面にひそむ我愛の心をふかく反省したならば、おそらく自分の行為を善として是認することのできるものはいないであろう。善導が『觀無量壽經』の「至誠心」を解釈して

外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ

と説いて、真実心とは内外共に一致して真実なる心でなくてはならないと示したのに、親鸞がこの言葉を『教行信証』に引用する場合に

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ。内に虚仮を懐けばなり

と読みかえざるを得なかったのも、このような彼の立場が理解されれば、容易にうなずくことができるであろう。だから親鸞は五逆と謗法の罪についても

師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよし、ききさらふこそ、あさましくさふらふ。すでに謗法のひととなり、五逆のひととなり

末灯鈔第二十通

と理解したのであった。彼においては善悪の判断は、表面にあらわれた公道によってはじめて決定するものではなかった。悪心をいだいたことはすでに悪業を犯したものにひとしいものであったのである。心に色情をいだきて女人を見るものは、すでに姦淫せるにおなじきなり」という聖書の言葉もまたこの立場を示している。

ここまで掘り下げた親鸞においては、もはや生きていくということは罪を犯していることに外ならなかった。殺生は明らかに罪である。しかし誰か殺生を犯さないで生きている人があるか。海川に網をひき、釣をして世をわたるものも、野山に猪を狩り、鳥を取りて命をつなぐともがらも、商いをし、田畠を作り過ぐる人も同じこと」歎異抄第十三通）ではないか。そのようなものは永遠に救われないというのか。次に述べるようにとする悪人正機の思想は、このような立場が理解されなければならぬ。

悪と愚

なお、親鸞はみずから「愚禿」と称したのみ

ならず、しばしば人間を愚者と呼んだ。愚鈍の衆生」「愚悪の衆生」「垢障の凡愚」という言葉づかいがそれである。愚は賢に対する言葉であり、愚者は必ずしも悪人ではない。賢明な知識人であって罪を犯すものの何と多い現実の世相であることか。

けれども仏教においては、諸法は本来平等であると説き、この道理を体得することを悟りとし、これに反して我執にとらわれるものを迷いとす。したがって迷悟の区別は、この真理を見る智慧の有無によって区別せられる。悟りとは智慧の眼の開けたものことであり、迷いは盲いたるものの別名に外ならない。智慧は光にたとえられ、また明りにたとえられる。これに對して我執煩惱は闇にたとえられ、また無明といわれる。親鸞が『淨土和讃』の中に阿弥陀仏を「真実明」と呼び、われわれを「世の盲冥」というのも、その意味である。

されば親鸞における愚とは、世間的知識や学問をもたないものの意味ではなく、常に我執にとらわれた真理へ盲目者であることを意味する。しかも我執にとらわれながら、なおそれを我執にとらわれたものと気づかないところに、愚の愚たる意味がある。

ところで仏教における愚とは、すでに定義したように、第一義諦に背く行為であり、諸法平等の道理に背いて我愛の心にとらわれたものの行為に外ならなかった。かくて親鸞における愚と愚とは同意語であった。愚者の行為は常にあくでしかない。愚の行為をなすものを愚者と名づける。かくてすべての人間は愚者であると友に悪人である、と看破したのが親鸞であった。まことに徹底した人間観であった。

このような深い人間性の洞察に於いて、彼がその身心を投托したのが他力の救済であった。しばしば誤解されて用いられる、他力という言葉葉―依存主義や頼他主義には、なお自力の可能性の意味が含まれているが、親鸞における他力とは、極重悪人の自覚において、阿弥陀仏の本願に乗ずるより外に道なしと選んだ他力であった。親鸞におけるこのような悪と愚の意味が正しく理解される場合のみ、他力本願の意味もまた正しく理解されるであろう。

七 悪人なればこそ―悪人正機―

悪人正機

親鸞が人間を悪人とする立場は理解されたとしても、なお、そのような悪人こそ、まず救われなければならぬものとする悪人正機説への説明は充分ではない。まことに驚くべき親鸞の思想―悪人正機説を、もつとも明らかに示されたものは、『歎異抄』第三章の言葉である。

善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世の人つねにいはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはいはんや善人をや。この条一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり 云々

何という意外な言葉であろうか。しかし、この思想は決して『歎異抄』にだけ見えるものではない。すでに『教行信証』のはじめに

権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲すとあって、明らかに親鸞自身の思想であることが確認せられる。

とここで数ある批判や誤解の中で、おそらく

この思想ほど多くの誤解をうけたものはないであろう。すでに親鸞の生存中に、この教えを聞きあやまって、増悪無碍の邪見に陥る人々があつたことは、

そのかみ邪見におちたるひとあて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて往生の業とすべきよしをいひて、やうやうにあしざまなることのきこへさふらふ

第十三章

と記されてある『歎異抄』の文によって知ることが出来る。しかしそれはもとより親鸞の真意にもとるものであつたことは、これに対して彼がその手紙の中に「薬あればとて毒をこのむべからず」と、きびしく誠めていることから明らかである。

誤解の生ずる原因は何か

では、悪人正機の教えから、このような誤解の起る原因はどこにあるのであろうか。その理由は次の三点に要約することはできないであろうか。

- (一) 道徳の立場と宗教の立場との混同
- (二) いわゆる悪人が、自己自身のこととして受けとられているか、どうか。
- (三) 正機とは、仏の慈悲の側からの言葉であることが理解されているか、どうか。

第一の点については既にのべた通りである。親鸞の他力信仰は、廃悪修善の道徳的宗教が破綻したところから出発していることが理解されなければならない。だから道徳の実践によって成仏という理想を実現できると考えている人々には、おそらく容認できない思想であるにちが

いない。しかしその人たちにおいては、悪人は永遠にすくわれぬものなのであろうか。

第二の点については、仏教はどこまでも自己自身の解脱にかかわる教えであり、単にながめられた人間研究の教えではないことが理解されなければならない。親鸞は

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり

歎異抄・結文

といった。彼における悪人とは、客観的にながめられた人間のすがたではなく、彼自身の内観の眼に映った人間のすがたであつたのである。他人を悪人と侮蔑しているのではない。自己を悪人として慚愧している言葉である。

第三の点については、親鸞が『教行信証』に引用した

譬えば一人にして七子有らん、是の七子の中に病いに遇えば、父母の心は平等ならざるには非ざれども、然も病子に於いて、心則ち偏えに重きが如し。．．．如来も亦爾なり。諸の衆生に於いて平等ならざるに非ざれども、然も罪なる者に於いて、心則ち偏えに重し。放逸の者に於いて仏則ち慈念したもう。不放逸の者は心則ち放捨す

信巻

という『涅槃経』の文をよめば明らかであろう。慈悲はすでに道徳の心ではない。道徳を超えた立場にある心である。悪人正機とは仏の慈悲の立場からの言葉である。仏からの言葉であるものを、人間からの言葉として持ちなおすとき、この言葉は道徳を破壊する言葉となり、倫理を無視する言葉となる。われわれは誤った人間からの言葉として用いてはならない。

悪人正機思想がよび起すもの

悪人正機思想は、このような立場に立つ思想である。親鸞が、阿弥陀仏の第十八願に「唯、五逆と正法を誹謗するものを除く」とある言葉を、かえって仏の願心はそのような極悪人に注がれているものとして受けとったことは、一見、大胆きわまる無謀な解釈のように見えるけれども、このような彼の立場が理解されれば、そういう理解こそ、仏意にかなったものであることがうなずけるであろう。まことに親鸞は目をもつて經典の文字を読んだ人ではなく、身体をもつて、文字の底に流れる仏心をつかんだ人であった。

されば親鸞の悪人正機説は、自己の悪を是認するものでもなければ、まして悪をすすめる教えではない。廃悪修善の道に敗れ、底知れぬ罪業に悲歎するものに注がれる、仏の大悲心を頂戴した人の表現に外ならない。従ってこの仏心に目ざめるものは、自らの悪業を慚愧しつつも、かえって仏意にこたえようとする嗜みの心がおこらねばならない。道德の限界を心得ないで、自己の善に誇る人にもまして、きびしい反省と積極的な善への追求実践が行われなければならぬ。そこに、一たびは否定せられた倫理的行為が、再び報恩行としてよみがえる理由がある。

かくて悪人正機思想は、人々として人間の真実相に目ざめしめるとともに、その深い自覚の立場から、新しい意味をもって道德的、社会的実践をよびおこす思想であるということがいえる。

学問上の諸問題について

なお、親鸞の悪人正機説について、学問的には色々な問題がある。たとえば正機とは傍機に對する言葉であるが、悪人といわれる悪の意味を、万人に共通する普遍的な意味と解釈したならば、傍機たる善人はいなくなるのではないかという問題。そしてそこから悪人正機の悪人とは、当時の権力者たちから「悪人とよばれた」農民であるとか、あるいは漁獵を事とするような下層階級の人であるとか、また殺生を事とした武士を指しているものであるなどという、さまざまな説がなされている。けれどもかりにそういう社会階級的なある特定の身分や職業の人をさしていたならば、社会機構や変革や時代の変遷とともに、悪人といわれる人々の実態が変わることになる。阿弥陀仏の救済の対象が、時代や社会の変遷に伴って変わるというのは、滑稽なことといわねばならない。

ここではやはり宗教的善根を積むことのできないものを悪人とし、自力によって善根を積むことができるかと考えて、その道を歩む人々を善人としているとしなければならぬ。それは前掲の言葉につづいて

そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまるれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり

とあるからである。善人とは自力作善の人であ

り、悪人とは煩惱具足の凡夫のことに外ならない。

なお、近年「悪人もとも往生の正因なり」という言葉から、「悪人正因」ということを主張し、悪人であるということが救いの理由であるかのように主張する人があるので、それは決してそうではない。先の分に

自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり

といい、また他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり

とあるように、「他力をたのむ」ということ、阿弥陀仏の本願力に信順することこそ、往生の正因であるというのである。もし悪人であることが往生の正因であるというのであれば、本願の制約は無視されることになり、信仰そのものを否定する邪見に陥ることとなるであろう。

「正因」と言えば、「信心正因」を思い起こしませぬ。「信心」には、「機の深信」と「法の深信」の二種があります。「悪人正機」は「機の深信」に相当するものと思えます。「機の深信」は、決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず」とあります。これは「法の深信」決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して疑いなく慮りなく、かの願力に乗じて定んで往生をうと信ず」に裏打ちされたもので、私が自身を分析したものではありません。阿弥陀さまの智慧が私の実体を教えてくれて慚愧に至ることを言うのでありましょう。阿弥陀さまは、罪悪深重煩惱熾盛のあなただからこそ」というのが、阿弥陀さまから見た、救わずにはおれない「あなた」だということです。

初参式」を行いました

去る六月七日（金）、箭内絃音ちゃん
の初参式を挙行いたしました。おばあちゃん
にあたる鈴木登美子さんのご祥月ご命日法
要にあわせてのお参りでした。

お念珠と式章（まだ大きすぎるのです
が）をお渡ししました。おばあちゃんもご
一緒のお参りでした。



お墓参りしました



東組浄光寺境内墓地（中木原氏と稱讚寺
の共同使用のお墓です。

坂根さんは、毎月三日に奥さまのお月忌
法要をご自宅でおつとめであり、毎月、住
職がお参りに行かせて頂いております。

一月前に、七月三日は、新盆（七月盆）
も近いので、お墓参りをしましょうとお約
束しておりました。

当日は、お天気にも恵まれ、住職が車で
お迎えに行きますと、もう外に出ておら
れ、待つておられました。二人で東組浄光
寺様の境内にあるお墓にお参りしました。
久々のお墓参りで、坂根さんもお安心の様
子でした。

※七月八月、お盆法要をご自宅・お墓で行
きたい方は、ご連絡ください。日程調整さ
せていただき、お参り申しあげます。

東組組会・総代世話人研修会 報告

去る六月二十二日（土）午後二時より浄
光寺さんで令和元年度の東組・組会が行わ
れました。二十一カ寺中、僧侶議員十七
名、門徒議員十名の方に、出席いただき、
議事が進められました。

今年度の計画として、既開催であります
が、六月六日、東組仏教婦人会連盟総会が
築地本願寺で開催されました。

十二月十一日に東組実践運動推進僧侶寺
族研修会を開催予定。翌年三月十二日には
ご門徒さんも出席いただきたい東組実践運
動推進協議会を開催する予定です。

組会の最後、隆照寺の前ご住職の小柴正
照先生がこの度の春の叙勲で、永年の保護
司活動に対して「瑞宝双光章」受章されま
したので、東組よりささやかながらお祝い
の品「輪袈裟」を贈らせていただきました。

組会后、引き続き、総代世話人研修会を
行い、総勢三十五名の出席でした。ご講師
に西組浄圓寺の芝田正順先生をお招きし
て、ご法話をいただきました。「讀仏偈」
の「幸仏信明」から「七あわせ」について
お話され、子どもの貧困」のことについ
て触れられました。自分がなんと何も知ら
ず、気づかずにいたことかと反省せずには
おられないとおっしゃっておられました。

稱讚寺 行事予定

二〇一九年七月の行事予定

- 六日(土) のんのん法話会 午後一時
- 七日(日) 永代経法要 十二時半
- 四日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(火) のんのん法話会 午後一時
- 二日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 二六日(金) のんのん法話会 午後一時

※七月八月、お盆法要をおつとめのご予定がありましたら、ご連絡ください。

二〇一九年 八月の行事予定

- 四日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(火) のんのん法話会 午後二時
- 二日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(金) のんのん法話会 午後二時
- 八日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 二五日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 二六日(月) のんのん法話会 午後二時

二〇一九年 九月の行事予定

- 一日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(金) のんのん法話会 午後二時
- 八日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 五日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(月) のんのん法話会 午後二時
- 二三日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 二六日(木) のんのん法話会 午後二時
- 二九日(日) 日曜礼拝 午前九時

二〇一九年 七月法務・布教・出向予定

- 三日(水) 坂根家お盆(お墓) 九時半
- 六日(土) 中山家新盆(所沢) 十一時
- 七日(日) 稱讚寺永代経法要 十二時半
- 五日(月) 田中家新盆
・一周忌法要 十時
- 二日(日) 善了寺法助 十時
- 二七日(土) 松山家一周忌法要 十時
- 二八日(日) 福壽家納骨法要 十時
手島家一周忌法要 十四時

※十三日は、一ツ家三丁目町会の盆踊りにつき、法務はお休みさせていただきます(ことをご了承ください)。

ことば いや
言葉は 癒やしにも

ぶき
武器にもなる

二〇一九年 心のともしび「七月カレンダーより

二〇一九年度 稱讚寺門信徒会費

- 年会費 六千円
- 振込先 城北信用金庫 一ツ家支店
- 名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
- 代表 北村 信也
- 口座 普通 6176051